浪速の風と波を起こして

藤本 英子

京都市立芸術大学教授
大阪デザインセンター　評議員

時代が大きな音を立てて変化しています。10日前に始めたClubhouseから吹くその風は、また新たな自己確立をしていかないと、振り落とされる勢いでやってきます。明らかな時代の変革の風の中にいることを、実感しているところです。６０年の還暦を迎えたODC（大阪デザインセンター）も、同じ風の中にいることでしょう。大阪は本来デザイン活動の先進地として、日本のトップを築いていました。1925年から20年ほどの大大阪時代と呼ばれた時代には、東京を超えて日本一の人口を持つ都市として、デザイン活動も盛んに行われ、その後戦後の企業繁栄などもありました。

『日本・地域・デザイン史Ⅱ』（美学出版）で、大阪のデザイン史をまとめさせていただいた時に、大阪に思わず「残念史」と付けたくなるような、1970年万博頃からの衰退ぶりがありました。東京一極集中がデザインの仕事においても起り、ODC設立の頃からすでに厳しい時代が始まっていたのです。

京都市立芸術大学を卒業後、東京に東芝のデザイナーとして就職した頃は、デザインの賞として「Gマーク」と「大阪デザインセンター賞」への応募を、同じ感覚で出していました。また、東京で独立後1990年に大阪に戻り「大阪デザインセンター賞」の審査委員を何期も努めさせていただきましたが、デザイン賞としての一時代の役割を終え、残念ながら終了することになりました。

1981年設立された、国際デザイン交流協会は2009年に解散しましたが、行われた国際コンペは賞金の額も高く、世界のデザイン界から注目を集めていました。海外のデザイン市場や生活者の調査として、アジアなど各国への派遣も行われ、私もインドへの調査を行わせていただきました。これらの資料などはODCに引き継がれていますので、大阪のデザイン史として重要なアーカイブ機能を、ODCが担っているのです。

◆デザイン拠点の提案を続けて

大阪の残念史に気づいてからは、「なんとか大阪のデザイン界が元気になってほしい」との想いで、大阪駅前「うめきたⅠ期」開発のコンペに審査で関わった時に、新たにできる「ナレッジキャピタル」に、デザイン拠点ができないかと、事業者に提案し続けた時期がありました。ちょうどODCでは、事業の審査委員として関わり、大阪市の事業である「メビック扇町」の、業務委託事業者選定に関わっていた時期でした。大阪ではデザイン関連の行政組織が分かれて活動され、その連携が行われていないことがとても残念に思えたのです。それぞれの個性的な活動拠点はあっていいと思いますが、そこを連携して、さらに京都や神戸との連携を行うには、大阪駅前という立地が、とても大切な連結点となり、その連携にふさわしい場所であると思ったのです。

東京には「デザインハブ」が六本木にあり、日本デザイン振興協会や、他のデザイン関連の組織とギャラリーが１箇所に集まり、ふらっと立ち寄れる場があるのですが、大阪にはそのような場所がなく、どうしても海外や他都市からやって

きたデザイナーは、個別のデザイン事務所にアポをとって訪問するという形になっているのです。その場がナレッジになればいいと、計画完成までの数年間、事業者に提案すると共に事業者主催のイベントに毎週参加をして、デザインの魅力を伝え続けましたが、事業者への説得は通じないまま「ナレッジサロン（会員制施設）」という、交流の場の誕生に至りました。ただ、そこへのデザイナー関与が少しでも進めば嬉しいとの思いから、USD-O（大阪デザイン団体連合）のメンバーに声をかけ「ナレッジサロン（会員制施設）」ができる前に、そこで実現したいことのアイディア出しをすると共に、将来サロンで行いたいワークショップを、試験的に行いました。それがイベントとしての「大阪デザインサロン」で、今ではODCで継続的に行なってくださっている活動につながります。また、「ナレッジサロン」の会員制度を、ODCに関わるメンバーによる団体契約をお願いしたところ、快く束ねて申請を行なってくださることになりました。

◆新たな「デザイン政策宣言」に向けて

2012年4月20日、この日は私にとって記念すべき日となりました。ODCに長らく関わられ、その歴史の記録を重ねて来られていた、西尾直氏が亡くなりお通夜が行われた日でした。この日メビック扇町で「大阪・デザインの明日を考える」というタイトルでJDPU（協同組合ジャパンデザインプロデューサーズ ユニオン）主催の講演を行い、大阪でデザインに関わる多くのみなさんと、次の活動を始めるきっかけの日となるはずでした。しかしこの日は当然ながら、多くのデザイナーが西尾さんのお通夜に行かれ、私の講演会への出席者は、限られたメンバーとなったのです。この出来事が私には、残念なことではなく、何かのメッセージをいただいた気がしました。西尾直氏は大学の同じ専攻の大先輩に当たります。今の理事長である越田英喜氏も、同じ先輩ですが、何か背中を押された気がする不思議な想いで、その講演をさせていただきました。

東芝から独立した時にアントレプレナーとしてつけた職の名前は「公共空間デザイナー」でした。1970年万博を小学生として何十回も経験した私には、日常生活をしている街のデザインがもっと美しくなる可能性を持っていると思ったのです。建築家やインテリアデザイナー、ランドスケープデザイナーという職業はあっても、公共の空間をトータルにデザインしている職能がないところに課題を感じ、そのデザイナーになりたいと思いました。その後「景観」という言葉も一般化して、法律も制定され、多くの自治体で景観を指導する立場になりました。これまで9000件以上のアドバイスを行なってきましたが、これも自治体のデザイン分野にあたります。先進的な自治体では、ユネスコのデザイン都市の指定によって、まちづくりやものづくりのデザインが市民権を得て、一般の人々の身近なものになってきましたが、これから本格的に行政の政策として、デザインをトータルに取り入れる時代が、ようやくやってくると思っています。

先頃、経産省では「デザイン経営宣言」が提唱され、経営におけるデザイン視点の重要性が、ようやく国の中での市民権を得た感じがあります。これが地方自治体でも、「政策」にデザインの活用いわば「デザイン政策宣言」が求められる状況が常識となる時代が、目の前に来ています。振り返れば大阪でも、行政の中でデザイナーが活躍した時代がありました。その多くが形態的なデザインではあったかと思いますが、それを超えた広義のデザインが、いま社会で語られている中、まず大阪から「デザイン政策宣言」を発信できればと思います。

これまで、JIDA（日本インダストリアルデザイナー協会）の理事として４期をつとめてきましたが、ここでも「デザイナー協会」から「デザイン協会」に改名を行うなど、社会ニーズの大きな変化を感じています。関西のUSD-Oや全国のデザイン組織連携団体D８など、分野別のデザインを超えて、ようやく新たなデザイン活動を始める時期が来たように感じます。社会の大きな変化の風に、いかに乗って動けるか、そのような柔軟性も求められることでしょう。また、どのような風が吹いても、信念をさらに深めて根をはる強さも求められることでしょう。風を読んで次に進む、その羅針盤となる越田理事長の元、無事ODCが還暦を迎えることができましたことに感謝致します。

長く評議委員を務めさせていただいている私の将来の夢の一つは、大学の大先輩でもある越田理事長のような役割を担える人物になることです。いつの日か、省庁の枠組みを超えて、地域全体の政策をデザイン視点でトータルに考える「デザイン政策」を、大阪からはじめる時代が来ることを夢見ているところです。時代の変化のその先に、浪速の風と波を起こして。